

第4問

次に挙げるのは、六朝時代の詩人謝靈運しゃれいいうんの五言詩である。名門貴族の出身でありながら、都で志を果たせなかった彼は、疲れた心身を癒やすため故郷に帰り、自分が暮らす住居を建てた。これはその住居の様子を詠んだ詩である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。(配点 50)

樵(注1)隱(ア)俱(ル)在(モ)山(ニ) 由(注2)来(ル)事(ハ)不(シ)同(ク)

不(シ)同(ク)非(ズ)一(ト)事(ト) 養(注3)痾(ヤ)亦(タ)園(ニ)中(ニ)

園(ニ)中(ニ)屏(注4)氛(注5)雜(シ) 清(注6)曠(ク)招(ク)遠(ニ)風(ヲ)

ト(注7)室(ヲ)倚(ヨ)北(ノ)阜(ヲ) 啓(ヒ)扉(ヲ)面(ス)南(ノ)江(カ)

激(セ)澗(メ)代(ヘ)汲(ク)井(ニ) 挿(ウ)槿(ム)当(ツ)列(注8)墉(カ)

群(ニ)木(ノ)既(ニ)羅(注9)戸(ニ) 衆(ニ)山(ノ)亦(タ)对(注10) **C**

靡(注8)迤(イ)趨(オ)下(ニ)田(ニ) 迢(注9)遞(イ)瞰(ミ)高(ニ)峰(ヲ)

寡(注10)欲(ヲ)不(シ)期(セ)勞(ヲ) 即(シ)事(ニ)罕(注10)人(ノ)功(ニ)

唯ダ開キ蔣(注11) しゃう生せいノ徑みちヲ
永ク懷おもフ求(注12) きう羊やうノ蹤あとヲ

E
賞(注13)心不レ可レ忘ル 妙(注14)善こひねが冀ハクハ能よク同ともニセシ

(注) 1 樵隱——木こりと隱者。

2 由来——理由。

3 養痾——都の生活で疲れた心身を癒やす。

4 園中——庭園のある住居。

5 氛雜——俗世のわずらわしさ。

6 清曠——清らかで広々とした空間。

7 ト室——土地の吉凶を占って住居を建てる場所を決めること。

8 靡迤——うねうねと連なり続くさま。

9 迢遞——はるか遠いさま。

10 罕人功——人の手をかけ過ぎない。

11 蔣生——漢の蔣詡のこと。自宅の庭に小道を作って友人たちを招いた。

12 求羊——求仲と羊仲のこと。二人は蔣詡の親友であった。

13 賞心——美しい風景をめぐる心。

14 妙善——この上ない幸福。

(『文選』による)

問1 波線部(ア)「俱」・(イ)「寡」のここでの読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ

選べ。解答番号は 29 ・ 30 。

(ア)

29 「俱」

- ① たまたま
② つぶさに
③ すでに
④ そぞろに
⑤ ともに

(イ)

30 「寡」

- ① いつはりて
② つのりて
③ すくなくして
④ がへんじて
⑤ あづけて

問2 傍線部A「由来事不同、不同非一事」について、(a)返り点の付け方と、(b)書き下し文との組合せとして最も適当な

ものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

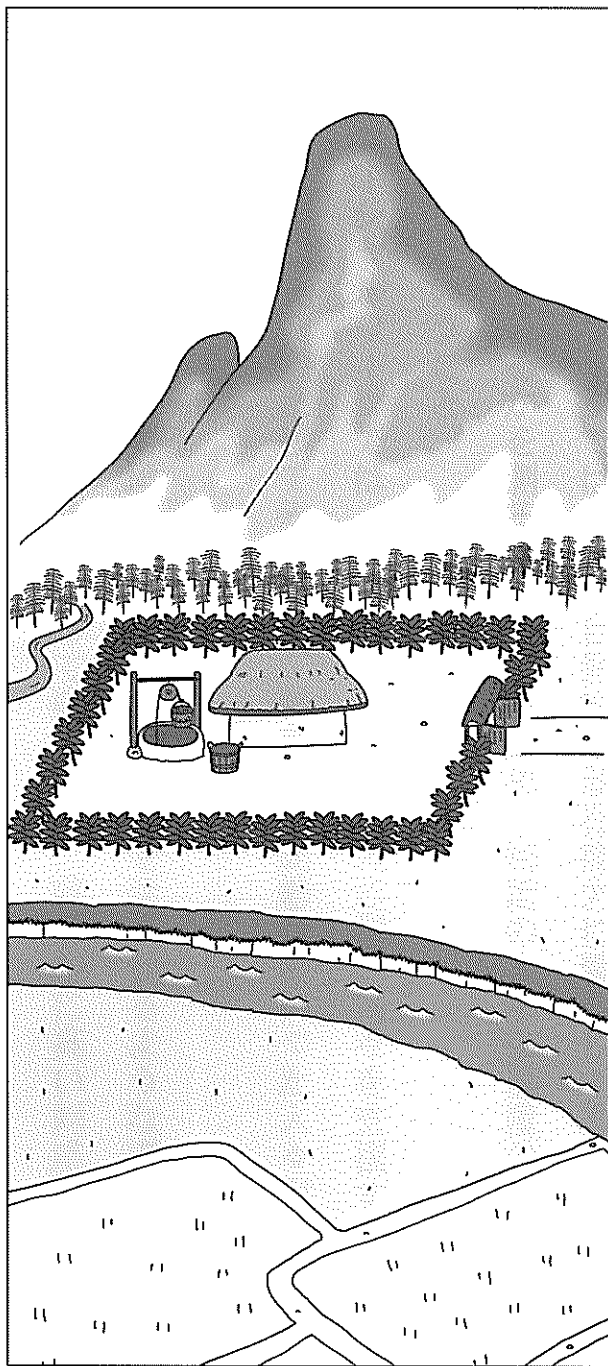
- | | | | | |
|---|-----|-------------|-----|--------------------------|
| ① | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じからず、一事を非とするを同じうせず |
| ② | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じからず、同じからざるは一事に非ず |
| ③ | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じうせず、一に非ざる事を同じうせず |
| ④ | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じうせず、非を同じうせずんば事を一にす |
| ⑤ | (a) | 由来事不同、不同非一事 | (b) | 由来事は同じうせず、非とするは一事に同じからず |

問3

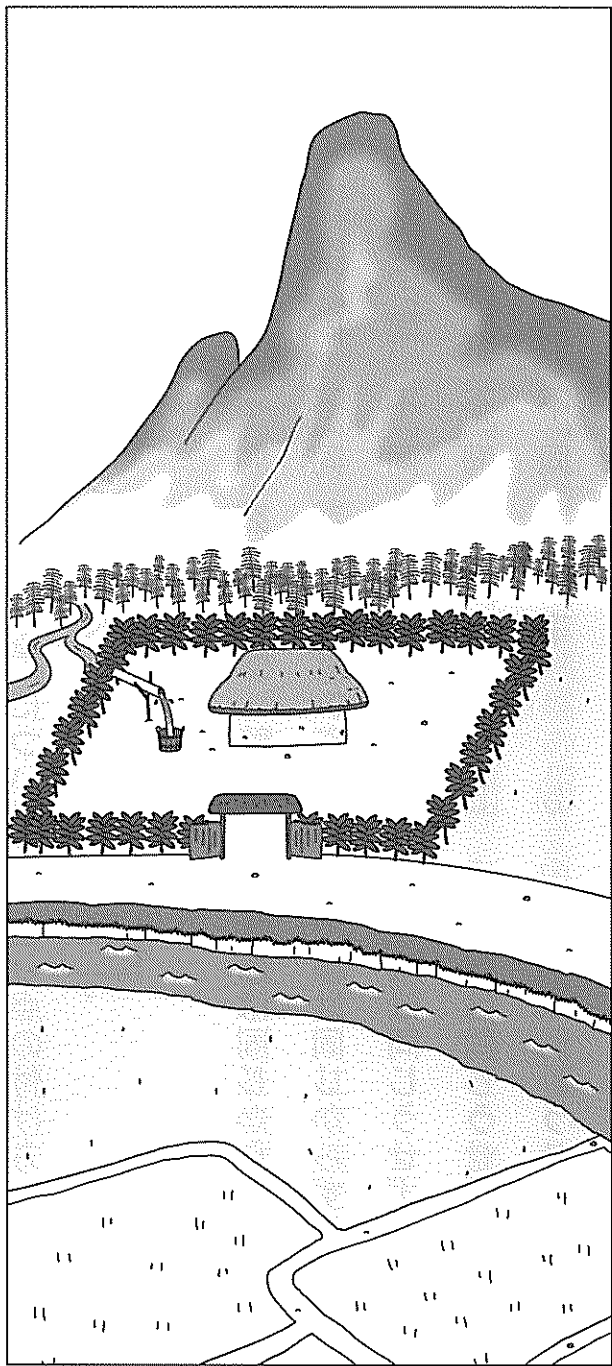
傍線部B「ト」室倚北阜、啓扉面南江、激潤代汲井、挿槿当列塙」を模式的に示したとき、住居の設備と周辺の景物の配置として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

32。

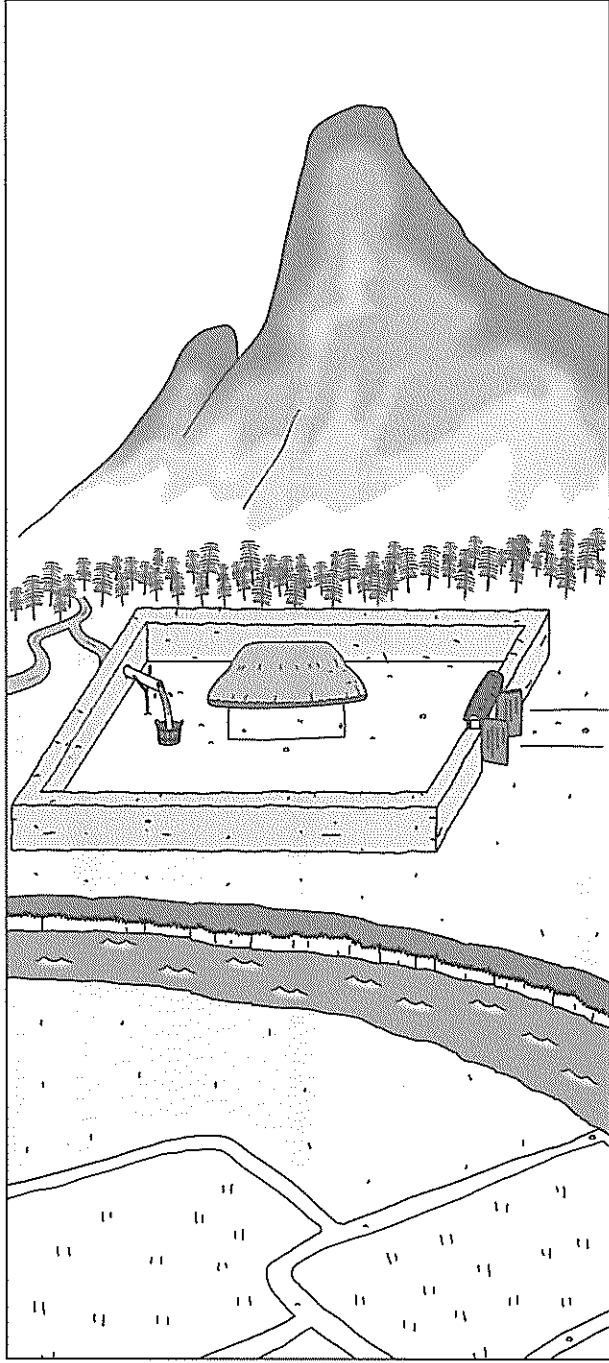
①



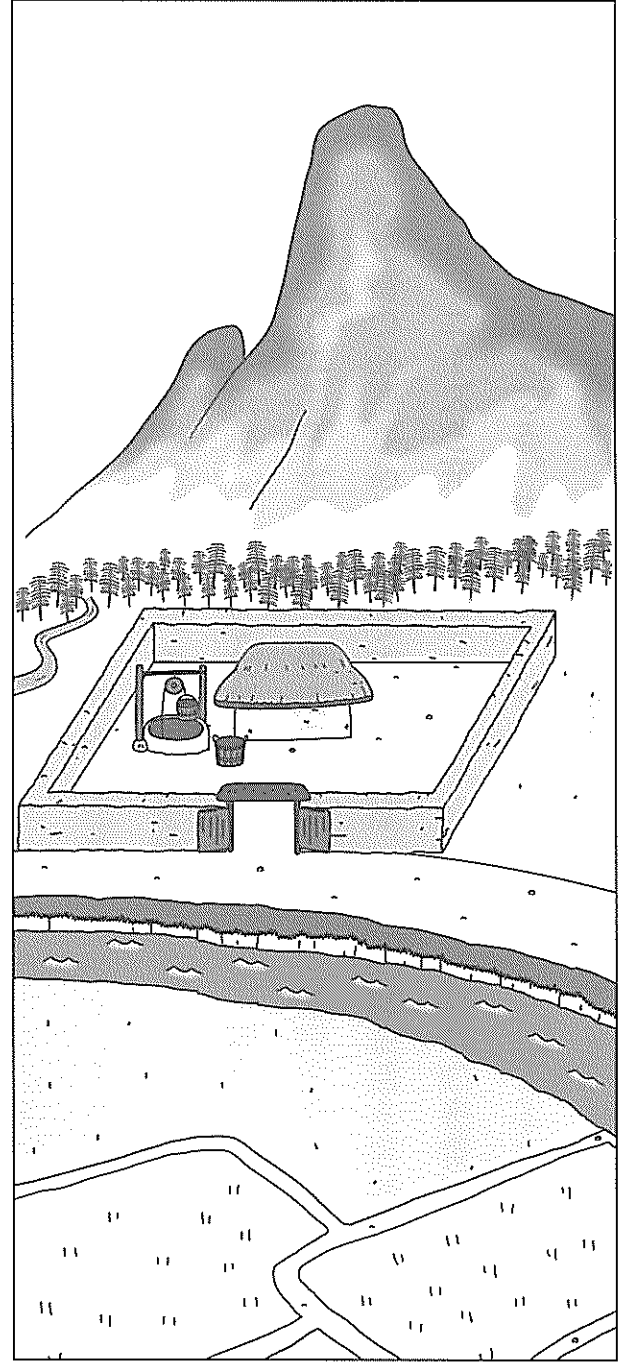
②



④



③



問4

空欄

C

に入る文字として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

33

- ⑤ 月
④ 門
③ 虹
② 空
① 窓

問5 傍線部D「靡迤趨_ニ下田、迢遞瞰_ニ高峰」の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 「靡迤_{びい}」という音の響きの近い語の連続が、「下田に趨_{おそむ}く」という動作とつながることによって、山のふもとの田園風景がどこまでも続いていることが強調されている。
- ② 「靡迤として」続いている田園風景と「迢遞_{てうてい}として」はるか遠くに見える山々が対句として構成されることによって、住居の周辺が俗世を離れた清らかな場所であることが表現されている。
- ③ 「迢遞」という音の響きの近い語の連続が、「高峰を瞰_みる」という動作とつながることによって、山々がはるか遠くのすがすがしい存在であることが強調されている。
- ④ 山のふもとに広がる「下田」とはるか遠くの「高峰」とが対句として構成されることによって、この詩の風景が、垂直方向だけでなく水平方向にもものびやかに表現されている。
- ⑤ 「趨_{おそむ}く」と「瞰_みる」という二つの動詞が対句として構成されることによって、田畑を耕作する世俗のいとなみが、作者にとって高い山々をながめやるように遠いものとなったことが強調されている。

問6

傍線部E「賞心不可忘、妙善冀能同」とあるが、作者がこの詩の結びに込めた心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① 美しい風景も、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめると、さまざまな見方を教わることができるので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか遠慮なく何でも言ってください。
- ② 美しい風景は、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめても、その評価は決して一致しないので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか私のことはそっとしておいてください。
- ③ 美しい風景は、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめてこそ、その苦心が報われるもので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか我が家のことを皆に伝えてください。
- ④ 美しい風景は、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめてこそ、その楽しさがしみじみと味わえるものなので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか我が家においてください。
- ⑤ 美しい風景も、漢の蔣生と求仲・羊仲のように、親しい仲間と一緒にながめないと、永遠に称賛されることはないので、立派な人格者である我が友人たちよ、どうか我が家を時々思い出してください。